常磐毎日新聞

日刊
定價 一部金貳錢 一ヶ月金五拾錢 郵税不要
廣告料 普通一行五拾錢 場所指定一行七拾錢
日曜祝祭日の翌日休刊
發行兼編輯人印刷人 坂本忠治
發行所 常磐毎日新聞社 電話六三〇番
印刷所 常磐毎日印刷株式會社 （振替口座）東京四〇二一〇番
六月一日夕刊

鰹一萬六千尾 小名濱港に水揚

いよ／＼鰹の本格的漁期に入り三十一日朝小名濱港に榮福丸（九七トン、中ノ作港所屬）が野島沖二百九十哩の海上で釣獲した鰹一萬六千尾を積んで入港したが

水揚げ高は平均八割五分といふ好値で濱は久し振に活氣が漲つてゐる

尚縣水産指導船磐城丸は目下新漁場開拓のため某方面に出動中で今明中には小名濱試驗場に無電の快報が入る筈で地元漁船はハリ切つて待期中である

軍人後援會御親授 帝國軍人後援會御親授式は今秋東京に擧行されるが同親授式に參列總裁閑院宮殿下より徽章の御親授を受ける本縣支會のうち本郡關係者は左の如くである

好間村 小田吉治
内郷村 馬目太平治

初代保健所長に 青沼淡夫氏が就任

平市八幡小路に新設される縣立平保健所の初代所長はかねて衛生課で選定中だつたがこの程青沼平市長令息淡夫(四三)氏と決定された

同氏は京都帝大醫學部出身、磐城炭礦病院に勤務してゐた人格圓滿な少壯有爲な人で同所では醫師一名、藥劑師一名、産婆看護婦三名、衛生指導員三名を擁し實務は七月一日頃から開始する模樣である

徐州戰に 吉田上等兵戰死 本日入電

小名濱町生れ磐崎村下湯長谷出身兩角部隊上等兵吉田一郎君は徐州會戰に參加壯烈な戰死を遂げた旨今一日入電があつた

同君は蒟蒻製造業子之松さん(五五)の長男で實家には母イソ(五二)さんの外五人の弟妹があり出征前迄は家業に從事してゐた

小名濱測候所 内容配備充實

中央氣象臺小名濱觀測所は航空並に海洋氣象觀測の重要さから來る七月測候所に昇格、同時に所員も三名增員となり觀測船の配備をもみることに決定された

昨秋十月縣の手を離れ國に移管されてから一萬七千圓で改築に着手既に本館はモダンな新裝なり殘るは外廓のみで竣功の慶びに溢れる〝みなと小名濱〟に一美觀を添へてゐる折柄この快報に小磯所長初め所員は勿論町當局も張り切つてゐる

漁夫の喧嘩 短刀で刺す

腹部に瀕死の重傷

小名濱町沖見町庄助四男傷害前科一犯漁夫佐川忠夫(三〇)は去る二十八日午前零時半頃同町カフエー小野瀬仲夫氏で同僚上野代大藏と飲酒中「コップ酒はうまくない」と難癖をつけ口論の末仲裁に入つた漁夫鹿島村御代生れ佐原三郎(三三)の下腹部を突刺し瀕死の重傷を負はせ逃走三十一日附近同僚宅に潛伏中平署員に檢擧

本郡唯一人

飯島部隊の犧牲者

飯島部隊の犧牲は三十一日午後原隊から發表されたが本郡關係者は山田村大字森字大津七准尉新妻清君唯一人の模樣である戰死場所日時何れも不明

同君は政太郎さんの四男で滿洲事變に出征し引續き〇〇戰線で活躍してゐた

寢所を窺ふ 五十男逮捕

上小川村大字上小川農渡邊高治(五四)は去る二十六日午後九時半頃同村荷馬車挽業阿部初さんと平市平窪の結婚式に招かれて一緒に歸宅したが阿部さんが馬車を輓えて歸るのを奇貨としてちか道して阿部の妻シン(三三)外子供五人の寢所に忍び入り騷がれて逃走一日平署に檢擧

木炭自動車 五臺平入り

既報ガソリン節約の積極策として新炭瓦斯普及會が主催し商工省の肝煎りで木炭自動車普及獎勵長距離走行を試みる事になり九型バストラック愛國式、白土式、陸式三浦式淺川式の五臺が來る十日商工省を出發十一日來平「木炭自動車」を使への講習會が開かれる

手長酌婦 内郷村綴某料理店抱酌婦檜山クニ(二〇)は本年一月頃から前後數回に亘つて同僚及び客から金品を窃取してゐた事平署で探知一日朝檢擧目下嚴重取調べ中

青年窃盜 内郷村大字竹ノ内無職加藤清一(一九)は去る二十八日夜同村雜貨商吉村實方に忍び入り現金煙草其他十餘圓を窃取した事發覺三十一日平署に檢擧

三浦敎諭が退職 磐中敎諭三浦義男氏は三十一日附退職された

被服縫製講習會 陸軍被服本廠の被服縫製講習會は六月三日平市平陽女學校に午前八時から開催最寄りの作業團体が受講するが、講師は本廠仙臺派出所長松村中佐である

性なし男起訴 既報—性懲りもなく釋放された足で無錢飲食を働き檢擧された四倉町鈴木孝平氏方漁夫折笠良一(三〇)は其後平檢事局で大脇檢事の取調べを受けてゐたが三十日詐欺罪で遂に起訴された

平市人事

◎出生

△鍛冶町一四高野眞(三〇)氏長女和子さん
△杉平一仲村三郎(三一)氏二男健二郎君

ラヂオ JODK

今日の部

▼後六、〇〇（子供の時間）物語劇「大阪城」大阪放送童話劇研究會
▼後六、二五 講演「戰時國策と民間の協力」河田嗣郎
▼後七、三〇 國民歌謠
▼後八、〇〇 連續新講談「糸の亂れ」栗島狹衣
▼後八、三〇 漫才「僕の親心」横山エンタツ
▼後八、五〇 義太夫「假名手本忠臣藏」竹本津太夫

明日の部

▼後〇、〇〇 朝鮮の端午節句風景
▼後二、〇〇 時事解說「五月の出來事」
▼後六、〇〇（子供の時間）木琴獨奏「山の牛乳屋さん」外 三上秀俊
▼後七、四〇 講演「航研機と學術研究」東京帝航研所長工博和田小六
▼後八、〇〇 連續新講談「糸の亂れ」栗島狹衣
▼後八、三〇 地唄「笹の露」江良千代

社告

今回の本社工場震災に關しましては種々御配慮を蒙りお蔭樣で既に紙面の復活を圖り得る迄に修復は進みましたが此の機會に工場内諸設備の堅牢と充實を期する作業を講する爲め三日迄現狀の紙面でお許しを戴きまして四日から從前通り倍版に回復致しますから何卒右御諒承願上げます

六月一日

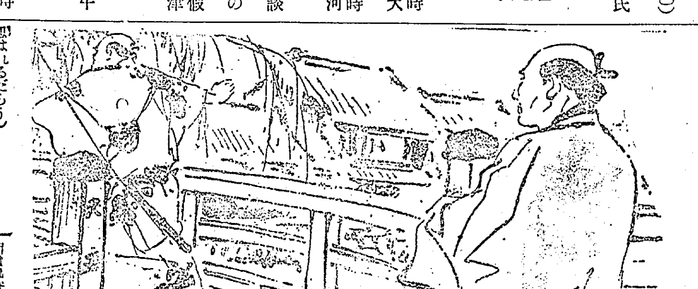
常磐毎日新聞社
社長 川崎文治

白柄劍風連

大島多良夫作
井川洗厓畫

……【其二十一】……

長兵衛旅立ち（三）



『氣の毒なのは旗本だからな、[illegible]つたか』

『へい、承知いたしました』

と、仁三は踵を返すと逸散に駈出した。

俠客生活のなかで、親分から杯を水にされると云ふことぐらゐ恥辱なものはないのであつた。だから、仁三は一生懸命に喧嘩場の方へ戻つてゆく。

その姿が街往く人々のなかへ消えるまで見送つてゐた長兵衛は、また十郎左衛門の氣持にも入つて行つた。

（水野さんだつて白柄組の頭領であつたら、矢ツ張り俺と同じ氣持に違ひあるまい、屹度今日の喧嘩のことを聞いたらば内心不愉快に思はれるだらう）

と、何となく不快に思ひ乍ら腕を組んでぶら／＼と花川戸の方へ歸つて行く。

すると、天王橋近く來ると、唐犬權兵衛が大手をひろげて止めながら、眞先に立つてゐる碇崎の小平、幡随の清吉、それから若手寶出の白鞘の金次、[illegible]者の聖天の寅右衛門など十五六人が喧嘩支度をして行くにバッタリと出會つた。

『待てつ！』

と、長兵衛は曾て出したことのないやうな素敵な大きな聲で怒鳴つた。

やつ、元締だとばかり一同は、鐵火に打たれたやうにギツリとして立停つた。

『おゝ元締、ちやうど好いところで……』

と、權兵衛も安堵したやうに云つて胸を撫でおろした。

『唐犬、能く止めて呉れた、俺の心を承知してゐるのはお前さんばかりだ。[illegible]心子知らず[illegible]』

『[illegible]、何か[illegible]すかい、今日の喧嘩のことを……？』

『聞いたよ、[illegible]に手を出したと云ふぢやねえか、あんなに云つてあるのになあ、何故[illegible]は俺の氣持が……』

『最う一つ元締の肚の底が呑み込めねえんですよ、俺は大[illegible]さんから能く聞いてゐることもあるんで、元締の[illegible]肚の底を知つてゐるんですけれども……』

『畜生、踏まれつ、馬鹿な奴等だ。白柄組の方から喧嘩を吹つかけて來ても知らん顏をしてゐるんだ、我慢をするんだ』

白鞘の金次は寅右衛門を始め若い手合をなだめ乍ら引揚げて行く碇崎の小平と幡随の清吉だけは面はゆげに默つて俯向いてゐた。

『碇崎、幡随、俺から云ふと妙に堅苦しくなるから、俺は何にも云はねえことにしやう。併し、唐犬から一つ俺の心の底を聞いて見て呉れ、どんなことを俺が考へてゐるかな、俺は此頃最う一つでつかいことを考へてゐるんだ、江戸の俠客でなく六十餘州の俠客にならうとな、ほんたうに弱い者の味方をする俠客、例へて見たらば白柄組のやうな表面ばかり強く見えても、その實うんと弱い武士階級の味方にもなる俠客にならうと思つてゐるんだ。眞實の俠客になるんだ。旗本などはお百姓よりも弱いつてことを考へなくつちや可けねえよ』

長兵衛は自己の心の底に芽生へて來た、或る理想の片鱗をそれとなしに語つたのであるが、併し、それは悲しいかな[illegible]の政治意識の乏しい碇崎の小平や幡随の清吉にははつきりと[illegible]かつた。

不滅のシンボル

（紙上映畫展覽會）

…第二十八回…

昂奮 (3)

それが、靜枝のことであつて忽ち發憤した杏二は、自ら進んで逸子と復交を温め、間もなく結婚したのである。其の逸子が重病に罹されてからは、妹の康子に彼の視線は強く注がれてゐたが、彼女が不慮の災厄に遇つて、運命は九天直下的に來て、彼は全くの孤獨に歸してしまつた。そこへ、可憐な容姿を現はしたものが香川早百合子なのである。杏二の眼は新に彼女の上に靜かに開かれたのだ。

……杏二は、さうしたいろいろの女性によつて、自ら様々の運命を切り開いて行かうとしてゐるのであつた。

×　×

其の驟雨の若い女が、果然友永靜枝と判つて、當の杏二が親しく會ふことの出來たのは、それから二日後のある日の朝であつた。

小春日和を思はせるやうな暖かい日で、杏二は宿舍の裏手の松原を散歩してゐた。靜枝と會つたのは其の時である。遇つたといふより、妙齢な彼女の麗貌を知つてゐた彼は、其の朝も丁度十時頃靜枝が出かけて行くのを見てゐたのだ。

靜枝は偶然にも矢張り杏二と同じ宿舍にゐるのだつた。杏二が若しやと思つたあの離方、此處へ着いたのだ。長髪の青年は彼の中村といふ男だつた。

『全く、あんたと此處で會合しようとは、夢にも思はなかつたなあ』

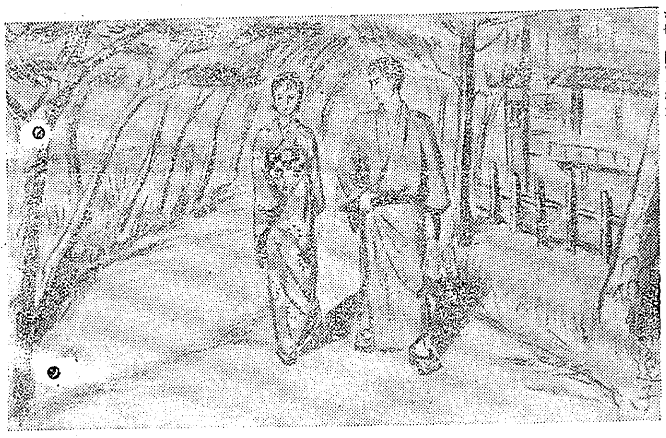
杏二は微笑の色を包みながら意外なことを、伸し、しみじみとした口調で言ふのだつた。

その前に、便所や洗面所への行き歸りに彼は二三度出會してゐるので、今日はそれほど驚いてもゐないのだが、親しく言葉をかけるのは、勿論今日が初めてゞある。

靜枝は意外にも獨りだつた。相手の男は家へ一寸歸つて、明日來るのだといふ、男の家といふのは近村のH村である。杏二は彼女から聞いて、初めてそれと知つたのだ。

『其の後、隨分變化があつたらしいね？』

暫らくしてから杏二は、十分言葉に皮肉を含ませて言つた。ちろちろと彼女の澄ました横顔を眺めるやうに凝視しながら。



前時分の無邪気な、そして清純な處女らしい面白は悉皆失くなつて、如何にも成熟した女らしい色彩を表はして、女振りも一段上つたやうに見えた。オールバックに結つて、派手な花模様の衣物を着てゐた。

『可なり……』

と、至極簡單に、そして低聲で言ひ放つたものゝ、迷惑さうな、自尊心を傷つけられたとでも云ひたさうな暗影が、一沫冷やかな其の面に表はれたのである。

歩いてゐるうちにも互ひに腹の中を探るやうな隙間が、暫し二人の間に打ち過ぎた。

牛を付けた荷車や、肥桶を昇いだ百姓などが前後から來た。

二人は度々右と左にそんなものを避けなければならなかつた。

『S町の早百合さん、知つてるでせう？何時だつたか、君は二人で歩いて、出會したさうだね？』

祝平市制一週年記念賣出し
期間……來ル6月3日ヨリ5日マデ3日間
愛市報國
一、我等の公會堂建設獻金として
一、出征軍人慰問獻金
◎賣出期間中御買上高の一部をお客様の御芳名記入の上獻納致します
◇當藥局獨得のサービス…金壹圓以上御買上の方に（但し化粧品は貳圓以上）
御家庭向實用品福袋進呈
◇オタノシミとして……福袋のうち幸運者は、東寶映畫聚樂館御招待券が當ります
◇戰地慰問の結合藥あります
キハツ油（小賣）いたします
◇衛生相談に應じます
平市古鍛冶町一〇番地〔電話四四番〕
阿康藥局
藥劑師　阿部康雄

美味・衛生的
夏!!飲料界の王座
アイスキャンデー
始めました。僅か一本……涼味が滿喫出來ます。是非御散歩がてら御出かけ下さい。
一不藤實
平市一丁目　電話一四一番

花柳病科外科
木村外科醫院
平市六丁目橋際　電話三〇九

胃腸病に一大黎明
皇漢藥　神効散
胃腸　心臟　便泌性に！
平市田町
阿部藥舖

レストラン
食事　喫茶　酒場を兼ねた
サロン
平市田町
電三五二

クレオソート　壹圓貳拾錢
精製コールタール　壹圓拾錢
鐵材金具工物
平市仲町通り
山田文一商店
電話二六二番

外科一般　レントゲン科
内臟外科　泌尿器科
北川外科
◎晝夜診療
イツデモ入院出來マス
（血液檢査毎日）
平市新川町二七（電話四六四番）
醫學博士　北川芳夫
技師　三浦常保

提灯と國旗
平四　スガノヤ　電九五

吉田眼科醫院
平市紺屋町
電話八六番

磐城セメント會社特約店
□良品廉賣に勝る商略なし
□確實敏捷は久の生命なり
釜屋商店
磐城平市五丁目
電話九・九九

耳鼻咽喉科專門
鈴木醫院
醫學士　鈴木正男
平市田町（藤田女學校前）
電話五八番

（夜間診療）
胃腸性病
内科　胃腸病科　花柳病科　性病科　皮膚科
專門
胃腸性病　松村醫院
平市南町（電話一〇七番）